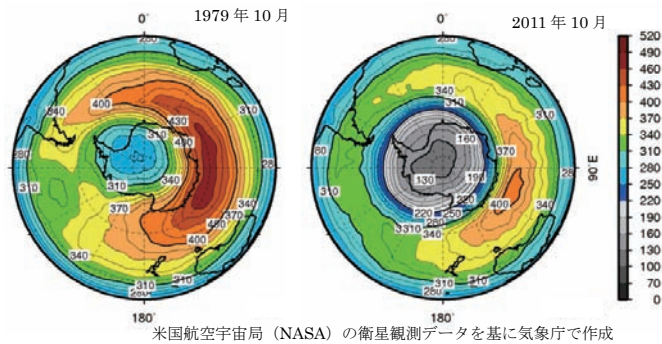


平成23年度

オゾン層等の監視結果に関する
年次報告書

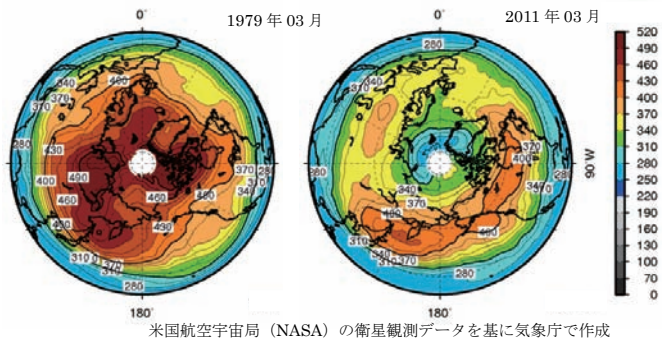
平成24年8月

環 境 省



米国航空宇宙局 (NASA) の衛星観測データを基に気象庁で作成

図 I 南半球における 10 月の月平均オゾン全量分布 (1979 年及び 2011 年)
出典：気象庁提供データ



米国航空宇宙局 (NASA) の衛星観測データを基に気象庁で作成

図 II 北半球における 3 月の月平均オゾン全量分布 (1979 年及び 2011 年)
出典：気象庁提供データ

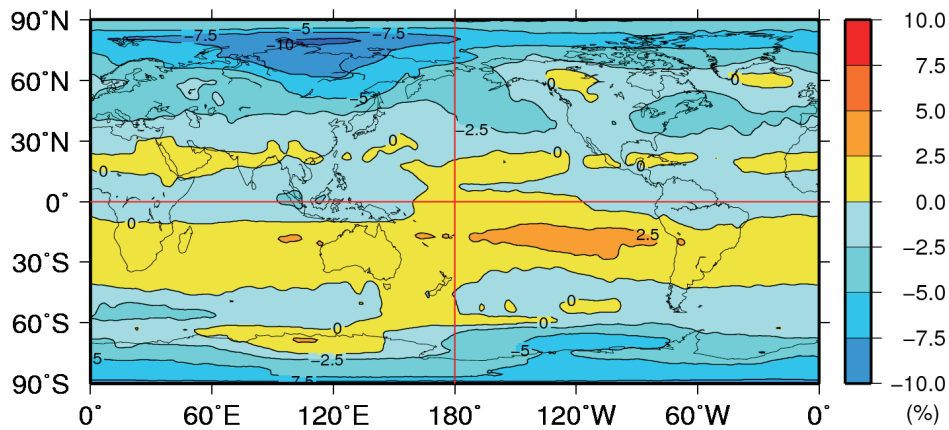


図 III 世界のオゾン全量偏差 (%) の年平均分布図 (2011 年)

※P18 図 1-3-6 として掲載

出典：気象庁 オゾン層・紫外線の年のまとめ (2011 年) より

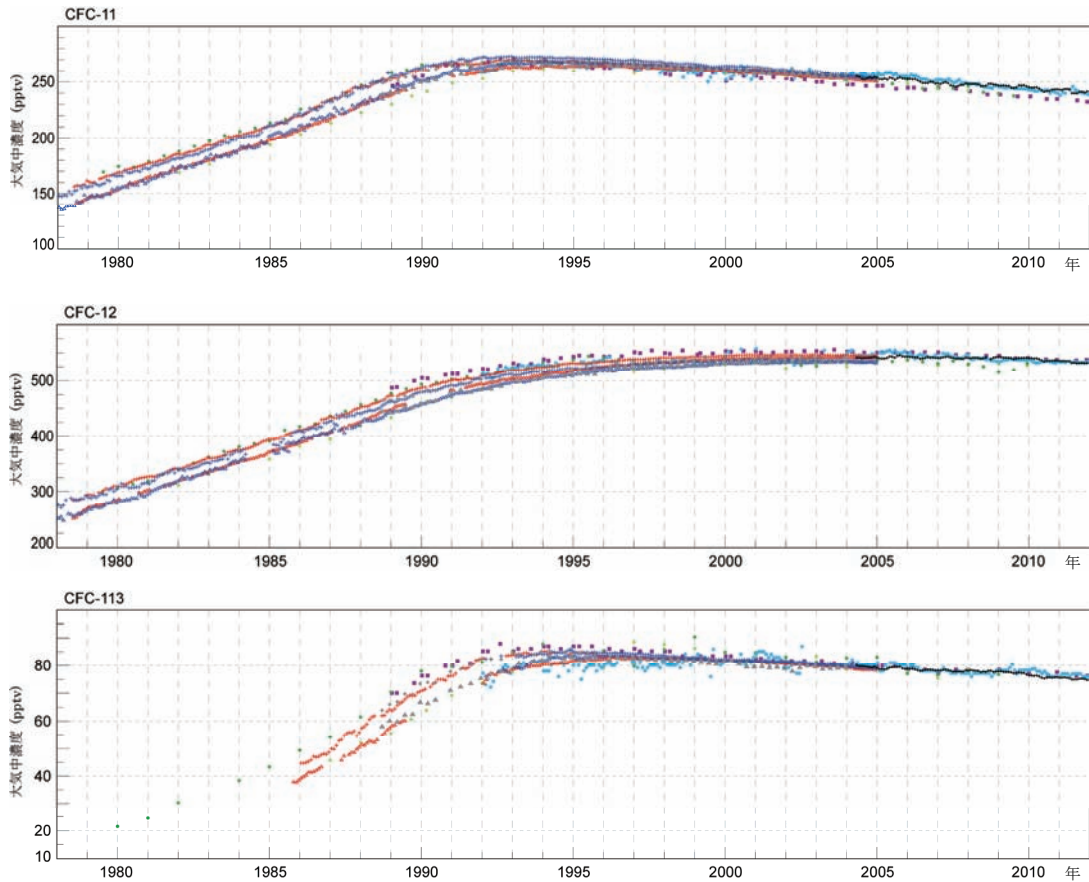


図 IV 国内外の機関で観測された CFC-11、CFC-12 及び CFC-113 の濃度変化

※環境省の観測結果 (P79 図 2-3-1。紫色で示す)、国立環境研究所の観測結果 (P84 図 2-3-8。黒色で示す)、気象庁の観測結果 (P85 図 2-3-9。水色で示す)、東京大学の観測結果 (P86 図 2-3-10。北半球中緯度を緑色、南半球を黄緑色で示す) の他、2006 年の WMO 科学評価パネル報告書 (WMO, 2007) で紹介された観測結果 (AGAGE のネットワークによる観測結果を赤色、NOAA/ESRL を青色、UCI を灰色の△で示す) を取りまとめたもの。

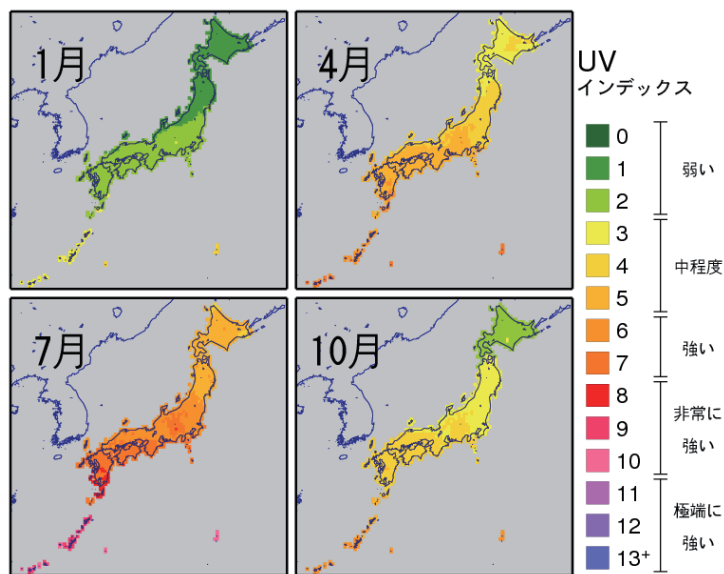


図 V 日本付近の日最大 UV インデックスの月別分布 (1997 年から 2008 年までの平均値)

※UV インデックス情報については P117 参照 出典：気象庁提供データ

はじめに

1974年、米国カリフォルニア大学ローランド教授とモリーナ博士によって、人工化学物質であるクロロフルオロカーボン（CFC）が成層圏のオゾン層を破壊することが初めて明らかになり、人や生態系に影響が生じると警鐘が鳴らされたことを契機として、オゾン層保護のための取組が進められるようになりました。1985年には、「オゾン層保護のためのウィーン条約」が、そして1987年には「オゾン層を破壊する物質に関するモントリオール議定書」が採択され、主要なオゾン層破壊物質の生産量・消費量が、明確な期限を定めて削減されてきました。

我が国はこれらの条約及び議定書の締約国であり、「特定物質の規制等によるオゾン層の保護に関する法律（オゾン層保護法）」を1988年に制定して、クロロフルオロカーボン（CFC）、ハロン、ハイドロクロロフルオロカーボン（HCFC）などの特定物質（オゾン層破壊物質）の製造数量の規制、使用事業者に対する排出抑制・使用合理化指針の公表等を行っています。

同法第22条において、環境大臣は、オゾン層の状況及び大気中における特定物質の濃度の状況に関する気象庁による観測の成果等を活用しつつ、特定物質によるオゾン層の破壊の状況及び大気中における特定物質の濃度変化の状況を監視し、その状況を公表することとされています。本報告書は、同規定に基づいて、2011年度（平成23年度）における特定物質によるオゾン層の破壊の状況、大気中の特定物質の濃度変化の状況等に関する監視結果をとりまとめたものです。

本報告書の作成に当たりましては、当省に設置しました成層圏オゾン層保護に関する検討会科学分科会及び環境影響分科会の指導を仰ぎました。また、気象庁からは、観測結果の提供等多大の協力をいただきとともに、「オゾン層・紫外線の年のまとめ（2011年）」から一部引用させていただきました。御指導、御協力をいただきました検討会委員の皆様、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

なお、本年はモントリオール議定書の採択から25周年という節目の年に当たります。折しも本年3月、CFCによるオゾン層破壊のメカニズムの発見以降、モントリオール議定書の採択や日本をはじめ世界各地でのオゾン層問題の啓発に貢献されたローランド教授（日本国際賞、ノーベル化学賞等受賞）が他界されました。地球規模の環境問題に対応するためには、世界各国における、多数の利害関係者の広範な協力が必要であり、困難を伴うことが多いところですが、故ローランド教授の活躍などにより、オゾン層問題は科学的知見に基づき地球規模の環境問題に予防的に対処し、目に見える成果を挙げた成功事例として、国際的に高く評価されています。

本報告書が幅広く活用されることにより、オゾン層保護及び地球温暖化防止に向けた取組が一層進められることを期待しています。

平成24年8月
環境省地球環境局

成層圏オゾン層保護に関する検討会

科学分科会

座長	富永 健	東京大学名誉教授
委員	秋元 肇	日本環境衛生センターアジア大気汚染研究センター所長
	秋吉 英治	国立環境研究所地球環境研究センター主任研究員
	今村 隆史	国立環境研究所環境計測研究センターセンター長
	岩坂 泰信	滋賀県立大学理事
	上窪 哲郎	気象庁地球環境・海洋部環境気象管理官付 オゾン層情報センター所長
	小川 利紘	東京大学名誉教授
	近藤 豊	東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻 地球惑星システム科学講座教授
	塩谷 雅人	京都大学生存圏研究所教授
	中根 英昭	高知工科大学環境理工学群教授
	林田 佐智子	奈良女子大学理学部教授
	巻出 義紘	東京大学名誉教授
	山内 恭	情報・システム研究機構国立極地研究所副所長・教授

環境影響分科会

座長	小野 雅司	国立環境研究所環境健康研究センター フェロー
委員	市橋 正光	神戸大学名誉教授
	今村 隆史	国立環境研究所環境計測研究センターセンター長
	上窪 哲郎	気象庁地球環境・海洋部環境気象管理官付 オゾン層情報センター所長
	近藤 矩朗	中央大学客員教授
	田口 哲	創価大学工学部教授
	竹内 裕一	東海大学生物学部生物学科専任教授

目次

概要	1
1. オゾン層の状況	1
2. 特定物質等の大気中濃度	3
3. 太陽紫外線の状況	4
第1部 オゾン層の状況	5
1. オゾン層の形成と分布・その変動	7
1-1. オゾン層の形成・分布・破壊	7
1-2. オゾン量の変動	9
1-3. 人為起源物質によるオゾン層破壊	10
2. 世界と日本のオゾン層の観測状況	11
3. オゾン層の監視結果	12
3-1. 地球規模のオゾン層の状況	12
3-2. 極域のオゾン層の状況	19
3-2-1. 南極域上空のオゾン層の状況	19
3-2-2. 北半球高緯度域のオゾン層の状況	26
3-3. 我が国におけるオゾン層の状況	29
4. オゾン層の将来予測	35
4-1. CFC、ハロン等オゾン層破壊物質濃度とその推移	35
4-1-1. 対流圏でのオゾン層破壊物質濃度の推移	35
4-1-2. 成層圏でのオゾン層破壊物質濃度の推移	37
4-2. 温室効果気体濃度の増加とオゾン層への影響	38
4-2-1. 温室効果気体濃度の推移	38
4-2-2. 成層圏での温室効果気体濃度の増加とオゾン層	39
4-3. 化学気候モデルを用いたオゾン層の将来変化予測	40
4-4. オゾン層破壊と気候変化の相互作用	44
参考資料	46
参考資料1. 成層圏におけるオゾンの生成と消滅	46
参考資料2. オゾン層観測手法の種類	52
参考資料3. オゾン層の観測ネットワーク	55
参考資料4. オゾンデータの管理・公表	56
参考資料5. 2011年の月平均オゾン全量と偏差(%)の地球規模の分布	57
参考資料6. 1979~2011年の南半球の月平均オゾン全量分布(10月)	59
参考資料7. 地上観測による南極域でのオゾン全量推移	62
参考資料8. 国内3地点のオゾン分圧・偏差の高度分布(2011年)	63
参考資料9. 南極昭和基地のオゾン分圧・規格化偏差の高度分布(2011年)	64
参考資料10. 成層圏数値モデル-化学気候モデルと化学輸送モデル	65
参考資料11. レーザーレーダー観測によるオゾン変動	67
第2部 特定物質等の大気中濃度	71
1. オゾン層破壊物質の種類と特性	73
2. 特定物質等の観測状況	75
3. 特定物質等の大気中濃度の監視結果	77
3-1. 特定物質等の大気中のバックグラウンド濃度の状況	77
3-1-1. 環境省による観測結果	77
3-1-2. 国立環境研究所による観測結果	84

3-1-3. 気象庁による観測結果	85
3-1-4. 大学・国際機関による観測結果	86
3-2. 日本の都市域における大気中濃度の状況	90
4. 特定物質の大気中濃度の将来予測	94
参考資料	96
参考資料1. 特定物質の特徴と用途	96
参考資料2. 北海道における特定物質等の平均濃度の経年変化	100
参考資料3. 川崎における特定物質等の平均濃度の経年変化	104
参考資料4. 波照間島における特定物質の平均濃度の経年変化	107
参考資料5. 都道府県・政令指定都市のオゾン層破壊物質の観測状況	109
参考資料6. 北半球中緯度・南極の特定物質等の濃度（経年変化）	110
参考資料7. 成層圏における特定物質の分布状況	112

第3部 太陽紫外線の状況

1. 太陽紫外線の概要	115
1-1. 太陽紫外線の概要	115
1-2. 紫外線の指標	115
1-3. 紫外線量の変動要因	119
2. 太陽紫外線の観測の状況	124
2-1. 太陽紫外線の観測手法	124
2-2. 紫外線観測状況	124
3. 太陽紫外線の監視結果	126
3-1. 世界の太陽紫外線の状況	126
3-2. 南極域の太陽紫外線の状況	131
3-3. 我が国の太陽紫外線の状況	133
4. 太陽紫外線の将来予測	135
参考資料	136
参考資料1. 紫外線による人の健康への影響	136
参考資料2. 紫外線による陸域生態系への影響	141
参考資料3. 紫外線による水圏生態系への影響	143
参考資料4. 紫外線による材料の損傷	146
参考資料5. オゾン層破壊によるその他の影響	147

第4部 巻末資料

1. オゾン層保護対策	155
1-1. オゾン層破壊物質等の概要	155
1-2. オゾン層保護対策の経緯	158
1-3. 国際的なオゾン層保護対策	161
1-4. 我が国におけるオゾン層保護対策	166
1-5. オゾン層保護対策の効果	179
2. WMO 科学評価パネル報告書要旨（2010年）	183
3. UNEP 環境影響評価パネル報告書要旨（2010年）	197
4. 参考文献	205
5. 英略語一覧	209